

# HOT CHART 2018

## 旅行・施設

### 2020年を見据えた動きが活発に全国で施設の改装や改修が進む

訪日外国人のリピーターが増えたことで、東京や京都に集中していた訪問先の地方都市への分散はさらに進んでいく。各地で食文化や伝統産業、祭りなどを観光資源として活用しようとする動きが盛んだ。一方、民泊の法整備によって宿泊の概念も変わり、政府が訪日客4000万人を目指す20年を見据えた動きが活発化している。太陽の塔内部の48年ぶりの公開や、鉄道博物館のリニューアルなども含め、日本各地から届く新しい話題の多い1年になりそうだ。

#### ★★★ OMO(おも)



旅館の再生など観光業界に新風を吹き込んだ星野リゾートの新業態「OMO(おも)」が、18年4月に北海道・旭川、5月には東京・大塚にオープン。同社は、ビジネスホテルの宿泊客の半数が観光客であることに着目。ビジネスホテルのように手頃な価格ながら、カフェなどのスペースを重視し、観光客に特化。周辺の飲食店と連携し盛り上げていく。

#### ★★★ 三井不動産 SPORTS LINK CITY FUN-TE!

仙台市泉区に18年春に誕生するのはスポーツを核とした施設だ。内外装を一新したアイスリンク仙台は羽生結弦選手も練習したリンク。「MIFA Football Park」はMr.Children桜井和寿とGAKU-MCのユニット「ウカスカジー」を中心に音楽のライブやサッカーの大会を行う施設だ。バーベキューなどが楽しめる「WILD BEACH」は東北初進出となる。



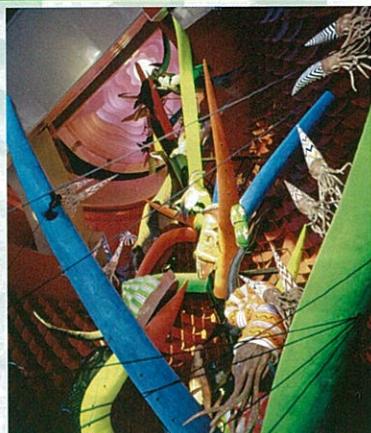
#### ★★★ 幕末歴史旅

18年は、江戸幕府が終焉を迎えた「大政奉還」からちょうど150年。NHK大河ドラマでも幕末を描いた「西郷(せご)どん」が放送される。各旅行会社では、幕末や明治維新のゆかりの場所を巡るツアーをこぞって企画中。鹿児島市「維新ふるさと館」(下写真)など、西郷どんブームに備えてリニューアルを行う施設もある。



#### ★★★ 「太陽の塔」の内部公開

70年の大阪万博で、芸術家の岡本太郎により造られた「太陽の塔」。耐震工事と復元作業を終え、18年3月に大阪万博から約50年ぶりに一般公開される。一番の見どころは、高さ約41mのオブジェ「生命の樹」(右写真)。原生生物から人類に至る生命の進化の過程を表現している。また万博閉幕後に行方不明となっている「地底の太陽」が公開に合わせて復元される。これは塔の頂部、正面、背面の顔に続く“4つの顔”的オブジェだ。



①太陽の塔内部にそびえ立つ、生命の進化の過程を表現したオブジェ「生命の樹」

②現在、耐震工事と内部の復元作業が進められている太陽の塔。安全面の配慮から公開は1時間約160人の予定。入館料は高校生以上700円、小中学生300円(ともに税込み)

#### ★★★ 鉄道博物館リニューアルオープン

埼玉・大宮の鉄道博物館が、18年夏に全面リニューアルオープンする。新たに建設される新館には、運転士など鉄道を支える仕事に挑戦できる体験型ミュージアム「仕事」や、鉄道の歴史の中にタイムスリップできる「歴史」など、3つの展示ゾーンが設けられる。新たにレストランなども整備され、より家族で楽しめる施設になりそうだ。



③運転士や車掌など、鉄道を支える仕事を体験できる「仕事」ゾーン  
④未来の駅や鉄道にアバターで入り込むミュージアム「未来」



#### プロが注目!

#### キーワードは心の教養を満たす旅



はとバス  
企画旅行部長  
**江澤伸一氏**

栃木県大谷石採掘場跡の「大谷資料館」。大谷石の歴史について、専門ガイドの説明を受けながら見学できる。心の教養を満たす旅として人気のツアーだ



#### プロが注目!

#### 「便利さ」から「愛着」へ地域満足がトレンドに



商い創造研究所  
代表  
**松本大地氏**

消費者が施設を選ぶ基準が、「便利さ」から「愛着」を持てるかにシフト。肝となるのが、地域とつながるパブリックスペースの充実と地域愛着消費だ。「ビエラ大津」(大津市)が好例で、駅ビルでありながらBBQテラスやラウンジを備え、地域の“リビングルーム”として賑わう場所になった。地域に愛されれば、観光客も自然と集まる。今後は「ローカルサティスファクション(地域満足)」を意識した施設がトレンドになる。